

平成 30 年度
八戸市における高齢者の居場所
に関する調査報告書~~(案)~~

～社会福祉法人白銀会「地域交流スペースそよ風」利用者に対する調査編～

平成 31 年 1 月 31 日
八戸市高齢福祉課

I. 調査概要

1. 調査経緯

八戸市では、平成 30 年度より八戸市生活支援体制整備推進協議会が設置され、多様な主体による自助や互助を推進するための各種検討が組織的に行われている。また、本事業の展開のなかで、地域住民、八戸学院大学の教員、同大学の学生(小柳達也研究室所属生)及び八戸市が連携・協力する「住み慣れた地域での生活を考えるワークショップ」(以下、ワークショップ)が市内各地で開催され、住民ニーズの把握と解決策の検討が同時に行われている。

平成 30 年 2 月 23 日、鮫地区、南浜地区及び白銀南地区を対象として実施された第 3 回ワークショップにおいて、参加者から「高齢者の居場所がない」という声が聞かれた。それが契機となり、同年 3 月 28 日に開催された第 3 回八戸市生活支援体制整備推進協議会にて八戸市内の高齢者の居場所に関する調査の実施について審議され、承認された。

その後迅速に、本事業の第一層生活支援コーディネーターによって市内における高齢者に対する居場所提供サービスに関する取り組みの先進事例について調査が行われた。結果として、昨今の社会福祉法人改革の潮流のなか、平成 29 年度より、社会福祉法人白銀会(以下、白銀会)「地域交流スペースそよ風」(以下、そよ風)において、その様なサービスの提供が行われていることについて確認された(表 1.1)。まだ萌芽的な取り組みであるが、一定程度の利用者が現れ、5 種類のプログラムを中核として、地域に根ざした居場所提供サービスが提供されているとのことであった。そこで、同法人の御理解と御協力のもと、そのサービスの利用者と従事者双方に対して実態把握調査を実施した。¹

¹ 本調査においては、利用者に対する調査をまとめた「利用者編」と従事者に対する調査をまとめた「従事者編」の合計 2 編の報告書を作成している。

表 1.1 そよ風の概要

所在地	八戸市堀ノ外9-3
開設日	平成29年4月1日
利用対象	基本的には、八戸市内の地域住民が利用対象とされている。 ² 年齢や障害の有無などは不問である。
1日あたりの参加者数	その日によるが、多いときで1日50名程度である。
プログラム	みんな食堂(毎月5日) : 食事の提供(子ども食堂の拡大版) おもいで学校(毎月10日) : 地域回想法 オレンジカフェ(毎月15日) : 住民間・世代間交流 元気はつらつクラブ(毎月20日) : 介護予防・健康づくりのための運動 ハーモニーの会(毎月25日) : 音楽を取り入れたレクリエーション
利用料	無料
従事者	白銀会の職員
経緯	<p>白銀会では、1980年代後半より、地域に密着した保育や高齢者福祉に関する事業が展開されている。また、平成23年の東日本大震災後には、法人職員が一体となった住民支援が実施されるなど、地域に根ざした福祉実践が続けられている。</p> <p>そのようななか、平成27年頃より、全国的に社会福祉法人による地域貢献活動が話題にのぼるようになったため、新たな取り組みについて検討されることになった。平成29年1月、本法人職員によって「子ども食堂を全世代向けに拡大して実施してはどうか」と提案されたことが契機となり、そよ風の構想がはじまった。職員間での検討のみならず、八戸市高齢福祉課を含む関係各所との意見交換が行われた後、中核とするプログラムなどの内容がまとめられた。そして、平成29年度より、主なコンセプトに「高齢者を含む地域住民への居場所提供」を据えたサービスの提供が開始されている。</p>

² 当初は、白銀会のある白銀町周辺の地域住民が利用対象として想定されていたが、平成30年9月現在、八戸市内の幅広い地域の住民から利用されている。また、人数は多くないが、市外から通う利用者もみられるようになっている。

2. 調査目的

本調査の目的は、八戸市の生活支援体制整備の一環として、そよ風において居場所提供サービスを利用する高齢者の実態について、当事者の意思を含めて把握することである。

3. 調査対象

そよ風を利用する八戸市在住の高齢者

4. 調査期間

平成30年9月5日～9月20日

5. 調査方法

対面法による自記式質問紙調査

6. 倫理的配慮

本調査は、八戸学院大学研究倫理委員会の承認を経て実施した(平成30年8月7日承認)。調査者から調査対象者に対して、書面と口頭にて調査協力は強制でないこと、途中の辞退も自由なこと、調査結果は統計的に処理され、個人を特定できない形でデータ化し、八戸市の生活支援体制の整備及び調査研究目的以外には利用しないことについて説明したうえで調査協力依頼が行われた。そして、調査協力に同意をした人に対してのみ調査を実施する体制がとられた。これにより、調査対象者の調査協力に対する任意性の確保に配慮した。

7. 回収率

調査票の配布は48件であり、全て回収された(回収率100%)。そのうち、65歳以下の回答者による3件を除き、結果的に45件を有効回収とした。

8. 調査項目

「性別」「年齢」「居住地域」「世帯形態」「要介護認定判定状況」「手段的自立能力」「インターネットの利用」「就業形態」「プロダクティブ・アクティビティ」「65歳以降に行ったことのある社会参加活動」「そよ風を知ったきっかけ」「そよ風の初回時の利用目的」「そよ風の利用に対する初回時の心配事」「そよ風の合計利用回数」「そよ風を複数回利用している理由」³「そよ風で好きなプログラム」「そよ風の利用が自身に与えた影響」「そよ風の利用料についての考え」「そよ風の適正な利用料についての考え」⁴「八戸地域における高齢者の居場所の有無」「八戸地域において求める高齢者の居場所」「八戸地域における高齢者の居場所の確保・創出・維持についての具体案」「一般的自己効力感」

9. 分析方法

基礎統計量の計測を基本としながら、適宜、クロス分析を行った。また、自由記述回答については、全ての記述内容を確認したうえでカテゴリ化を行った。

統計分析には SPSS Statistics24.0 を使用した。

10. 本調査において使用する主な概念の定義

(1) 高齢者

本調査では、国際連合(1956)による報告書「The Aging of populations and its economic and social implications」⁵に基づき、高齢者を「満年齢 65 歳以上の人」と定義した。さらに、「65 歳以上 75 歳未満の人」を前期高齢者、「75 歳以上の人」を後期高齢者と区別して定義した。

(2) 高齢者の居場所

既存の調査研究による高齢者の居場所の定義は多様であり、統一には至っていない。そのようななか、上野等 (2017)⁶は、高齢者の居場所に関する国内文献について網羅的なレビューを行い、物理的環境を居場所と認識された居場所である「物理的居場所」、人とのつながりや役割が得られるなど、人との関係やつながりを持てる場所と認識される「社会的

³ 本調査項目については、2回以上利用したことがある人のみを質問対象とした。

⁴ 本調査項目については、「無料とすべき」と考える人以外を質問対象とした。

⁵ United Nations. The Aging of populations and its economic and social implications. The Dept. 1956.

⁶ 上野佳代, 菊池和美, 長田久雄. 国内文献にみる高齢者の居場所に関する研究: エイジング・イン・プレイスにむけて. 老年学雑誌. 2017. 8. 33-50.

居場所」を抽出している。⁷一方で、居場所については、心や仮想現実(virtual reality)、SNS(social networking service)などのなかにそれをもつとする認識のされ方もある。また、自宅や遠方に存在する憩いの場を居場所と捉えることもできようが、本調査が照射している居場所は住み慣れた地域における自宅以外のそれである。これらを踏まえ、本調査では、高齢者の居場所を「自宅から通える範囲にあり、人との関係やつながりを持つことがかなう物理的に存在する場所」と定義する。

(3) プロダクティブ・アクティビティ

高齢者のプロダクティブ・アクティビティは、有償労働(paid work)と無償労働(unpaid work)からなる概念⁸とされる。そこで、本調査におけるプロダクティブ・アクティビティの定義は、岡本(2008)⁹にならい、Herzog 等(1989)¹⁰による「有償であろうとなかろうとモノやサービスをうみだす活動で、家事、子どもの世話、ボランティア、家族や友人への支援のような活動が含まれる」を用いることにした。そして、これら 3 つの領域については、柴田等(2012)¹¹の研究を参考として、「有償労働」を「収入を伴う仕事(家族従業、パート・アルバイトを含む)」、「家庭内無償労働」を「『家事(草取りや水やり、自転車の手入れ、家具などの修繕などを含む)』『買い物』『子守り』『介護・看病』」、そして「家庭外無償労働」を「『道路や公園の掃除など地域を良くする活動』『物を作って寄付したり、募金や古切手などを送る活動』『高齢者や障害者、子ども、福祉施設などに対する奉仕活動』『地域の活動や趣味などの会の世話役、手伝い』『民生委員、保護司、行政委員などの公的な奉仕活動』『友人や近所の人のために何らかの手伝い(家事や買い物、用事の手伝い、介護・看病など)』『その他の奉仕活動』」とそれぞれ具体的に定義した。

⁷ 上野等(2017)⁶は、国内文献のレビューから、高齢者が感じている居心地や心の拠り所と認識された居場所をさす「心理的居場所」についても抽出している。地域における高齢者に関する自助・互助についての取り組みにおける共通課題を当事者の参加の継続としたうえで、その参加がされる場が心理的居場所になれば継続できることを示唆しつつ、「物理的居場所が社会的居場所として存在し、心理的居場所になる可能性は新たな研究課題」との見解を示している。

⁸ Sherraden M, Morrow-Howell N, Hinterlong J, et al. 2001. Productive aging: Theoretical choices and directions. In Productive aging: Concepts and challenges, eds. by Morrow-Howell N, Hinterlong J, Sherraden M. Baltimore: The John Hopkins University Press.

⁹ 岡本秀明. 高齢者のプロダクティブ・アクティビティに関連する要因：有償労働、家庭内及び家庭外無償労働の3領域における男女別の検討. 老年社会科学. 2008. 29(4). 526-538.

¹⁰ Herzog AR, Kahn RN, Morgan JN. Age differences in productive activities. Journal of Gerontology. 1989. 44. 129-138.

¹¹ 柴田博, 杉原陽子, 杉澤秀博. 中高年日本人における社会貢献活動の規定要因と心身のウェルビーイングに与える影響：2つの代表性のあるパネルの縦断的分析. 応用老年学, 2012. 6(1). 21-38.

(4) 自己効力感

青木等(2001)¹²は、プロダクティブ・エイジングのための高齢者の意欲や意識を強化し、行動を起こさせる属性として自己効力感(self-efficacy ; 以下、SE)が注目されていることについて、この概念の特性や社会情勢を踏まえながら理論的に説明している。このSEという概念は、「自己の行動遂行可能性の認知、すなわち、ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるのかという個人の確信」¹³と定義されるが、在宅高齢者の社会参加活動意向との関連が予想される心理的要因¹⁴とされている。

本来、SEは特定の課題と密接に結びついた認知であるが、この概念には一般性の次元がある。すなわち、個々の課題を超越した一般的場面におけるSEといえるGSEが存在するとされる。¹⁵これらを踏まえ、本調査ではGSEを「日常生活などの一般的場面における自己の行動遂行可能性の認知、すなわち、ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるのかという個人の確信」と定義した。

¹² 青木邦男，松本耕二．在宅高齢者のセルフ・エフィカシーとそれに関連する要因．社会福祉学．2001．41(2)．35-48.

¹³ Bandura A. Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*. 1977. 84. 191-215.

¹⁴ 岡本秀明，岡田進一，白澤政和．在宅高齢者の社会参加活動意向の充足状況と基本属性等との関連．生活科学研究誌．2003．2．263-272.

¹⁵ 竹綱誠一郎，鎌原雅彦，沢崎俊之．自己効力に関する研究の動向と問題，教育心理学研究．1988．36(2)．172-184.

Ⅱ. 分析結果

前述のように、回収された 48 件(回収率 100%)の調査票のうち、65 歳以下の回答者による 3 件を除き、結果的に 45 件を分析対象とした。以下に分析結果を述べていく。

1. 性別

性別については、女性が 9 割近くを占めた(表 2.1、図 2.1)。

表 2.1 性別

	人数	割合(%)
女性	39	86.7
男性	5	11.1
無回答	1	2.2
合計	45	100

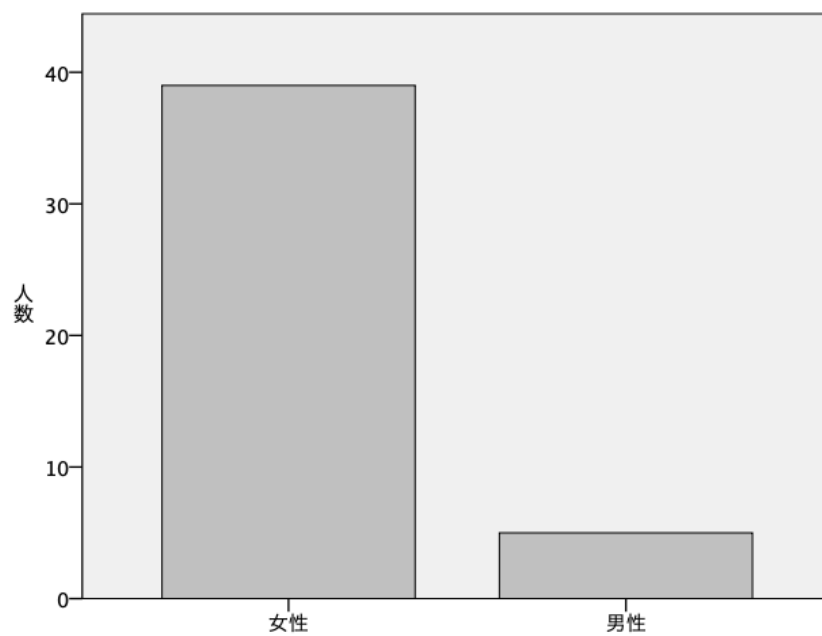


図 2.1 性別(無回答を除く)

2. 年齢

年齢については、「前期高齢者」(約3割)よりも「後期高齢者」(約7割)が約2倍多かった(表2.2)。また、平均年齢(平均値)と各年齢の分布は図2.2の通りである。

表2.2 年齢層

	人数	割合(%)
前期高齢者	14	31.1
後期高齢者	31	68.9
合計	188	100

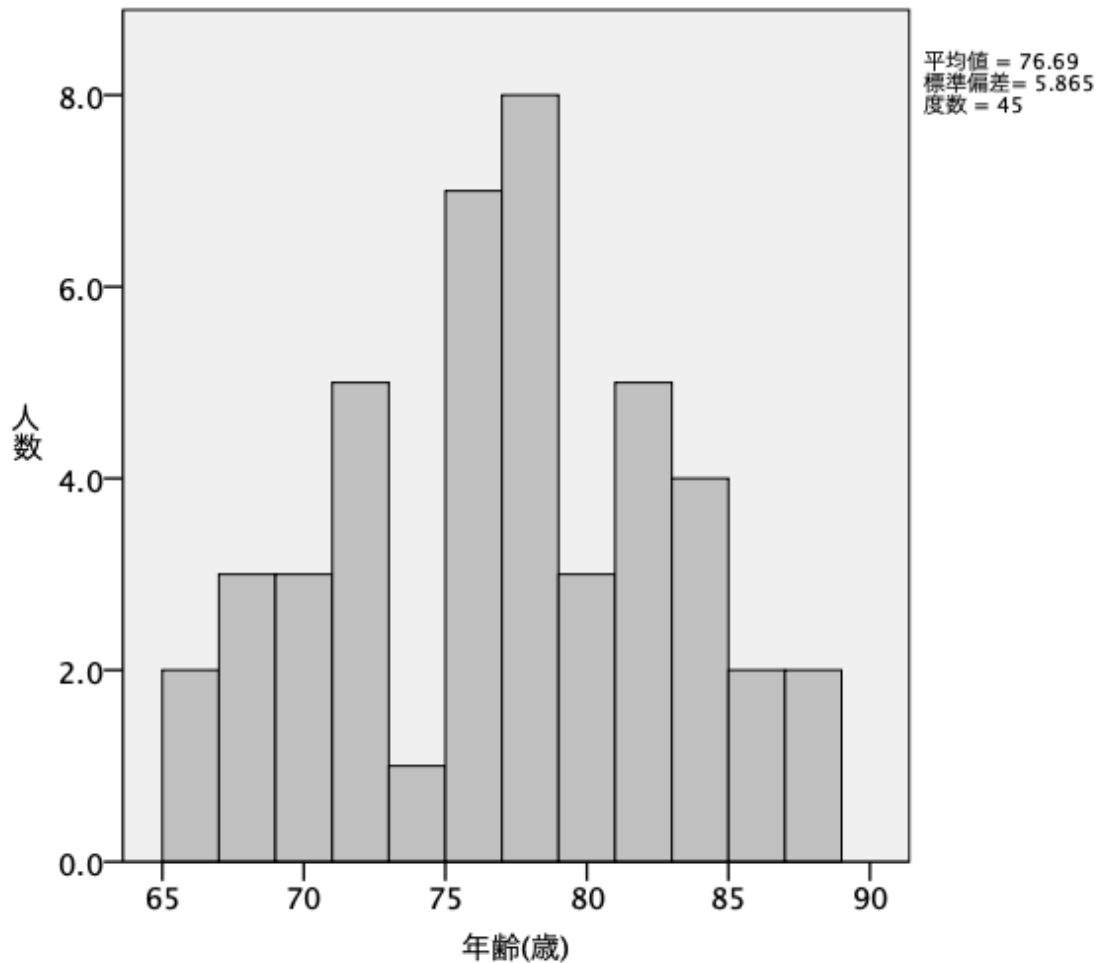


図2.2 平均年齢(平均値)と各年齢の分布

3. 居住地域

居住地域については、そよ風のある「白銀町」に居住する人が約6割を占めた。これに「岬台」(約1割)などが続いた。少人数であるが、「白銀町」以外にも多くの地域より来所していることが分かった(表2.3、図2.3)。

表 2.3 居住地域

	人数	割合(%)
白銀町	26	57.8
岬台	4	8.9
鮫町	3	6.7
湊町	3	6.7
大久保	2	4.4
旭ヶ丘	1	2.2
小中野	1	2.2
新湊二丁目	1	2.2
下長	1	2.2
新井田	1	2.2
根城	1	2.2
日計	1	2.2
合計	45	100

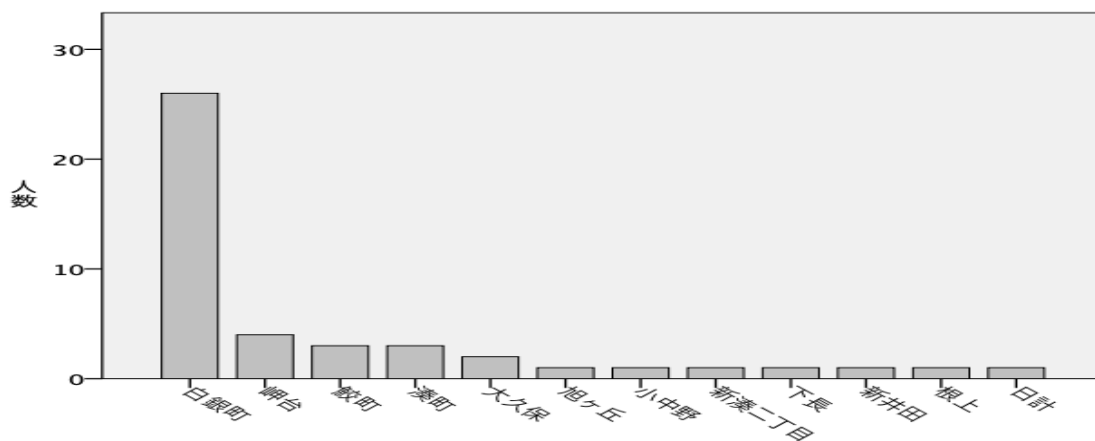


図 2.3 居住地域

4. 世帯形態

世帯形態については、「夫婦のみ」が5割近くを占め最も多かった。それに「子どもや孫と同居」(約3割)、「独居」(約2割5分)が続いた(表2.4、図2.4)。

表2.4 世帯携帯

	人数	割合(%)
独居	11	24.4
夫婦のみ	21	46.7
子どもや孫と同居	12	28.9
その他	0	0.0
合計	45	100

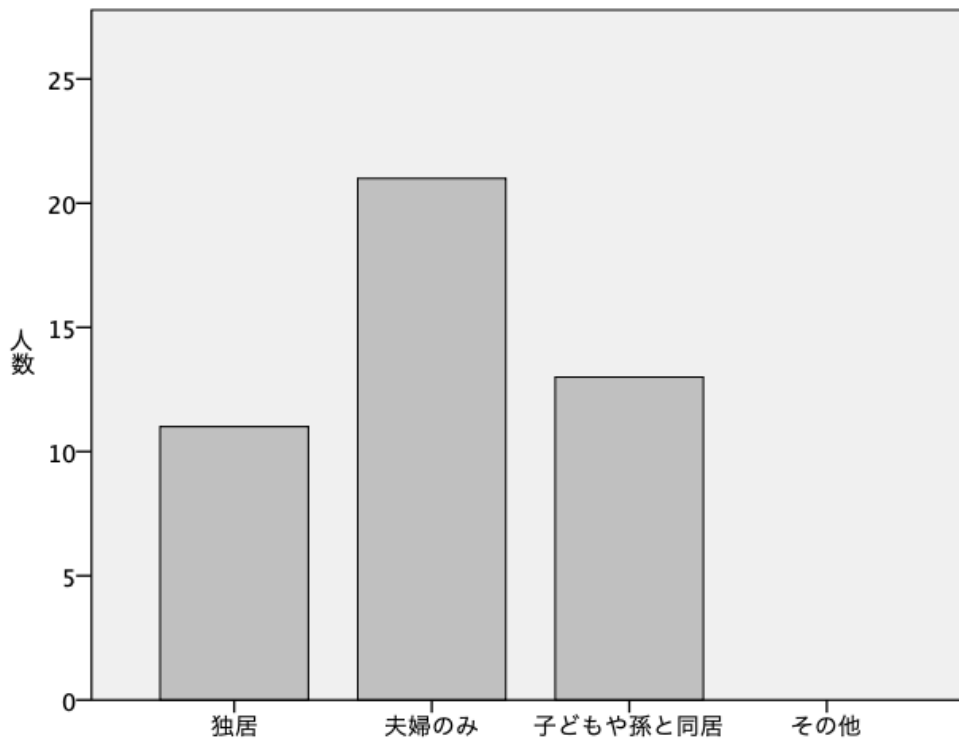


図2.4 世帯携帯

5. 要介護認定判定状況

要介護認定判定状況については、「認定を受けていない」人が約9割以上を占めた。また、「要支援2以上重度」の判定を受けている人は皆無であった(表2.5、図2.5)。

表2.5 要介護認定判定状況

	人数	割合(%)
認定を受けていない	42	93.3
地域支援事業対象者	1	2.2
要支援1	1	2.2
要支援2以上重度	0	0.0
無回答	1	2.2
合計	45	100

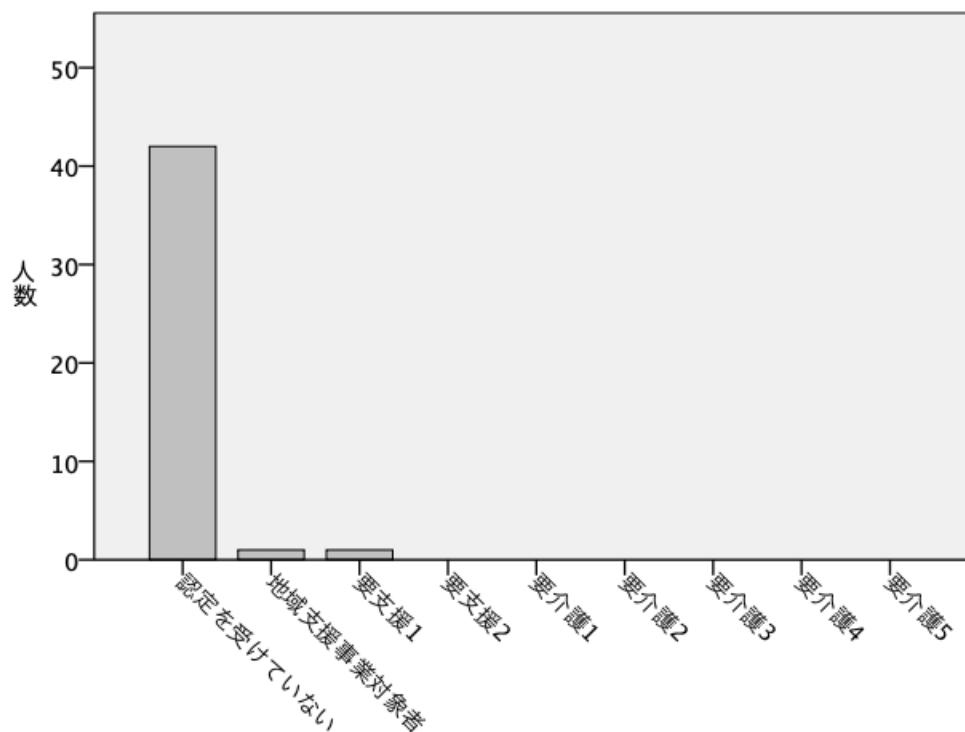


図2.5 要介護認定判定状況(無回答を除く)

6. 手段的自立能力

手段的自立能力(instrumental activity of daily living ; 以下、IADL 能力)については、古谷野等(1987)¹⁶が Lawton の階層モデルに基づき、高次の生活能力を評価するために開発した 13 項目の多次元尺度である「老研式活動能力指標(TMIG Index of Competence)」の下位尺度を使用した。本調査では、この下位尺度を構成する 5 項目それぞれの把握を試みた。

(1) バスや電車を使っての一人での外出

バスや電車を使っての一人での外出については、全員が「できる」と回答した(表 2.6.1)。

表 2.6.1 バスや電車を使っての一人での外出

	人数	割合(%)
できない	0	0.0
できる	45	100
合計	45	100

(2) 日用品の買い物

日用品の買い物については、ほぼ全員が「できる」と回答した(表 2.6.2)。

表 2.6.2 日用品の買い物

	人数	割合(%)
できない	1	2.2
できる	44	97.8
合計	45	100

¹⁶ 古谷野亘, 柴田博, 中里克治, ほか. 地域老人における活動能力の測定: 老研式活動能力指標の開発. 日本公衆衛生雑誌. 1987. 34(3). 109-114.

(3) 食事の用意

食事の用意については、全員が「できる」と回答した(表2.6.3)。

表2.6.3 食事の用意

	人数	割合(%)
できない	0	0.0
できる	45	100
合計	45	100

(4) 請求書の支払い

請求書の支払いについては、全員が「できる」と回答した(表2.6.4)。

表2.6.4 請求書の支払い

	人数	割合(%)
できない	0	0.0
できる	45	100
合計	45	100

(5) 預貯金の出し入れ

預貯金の出し入れについては、ほぼ全員が「できる」と回答した(表2.6.5)。

表2.6.5 預貯金の出し入れ

	人数	割合(%)
できない	1	2.2
できる	44	97.8
合計	45	100

7. インターネットの利用

インターネットの利用については、8割以上の方が「していない」に回答した。翻り、インターネット利用を「している」と回答した人は1割強に留まった(表2.7、図2.7)。

表2.7 インターネットの利用

	人数	割合(%)
していない	39	86.7
している	6	13.3
合計	45	100

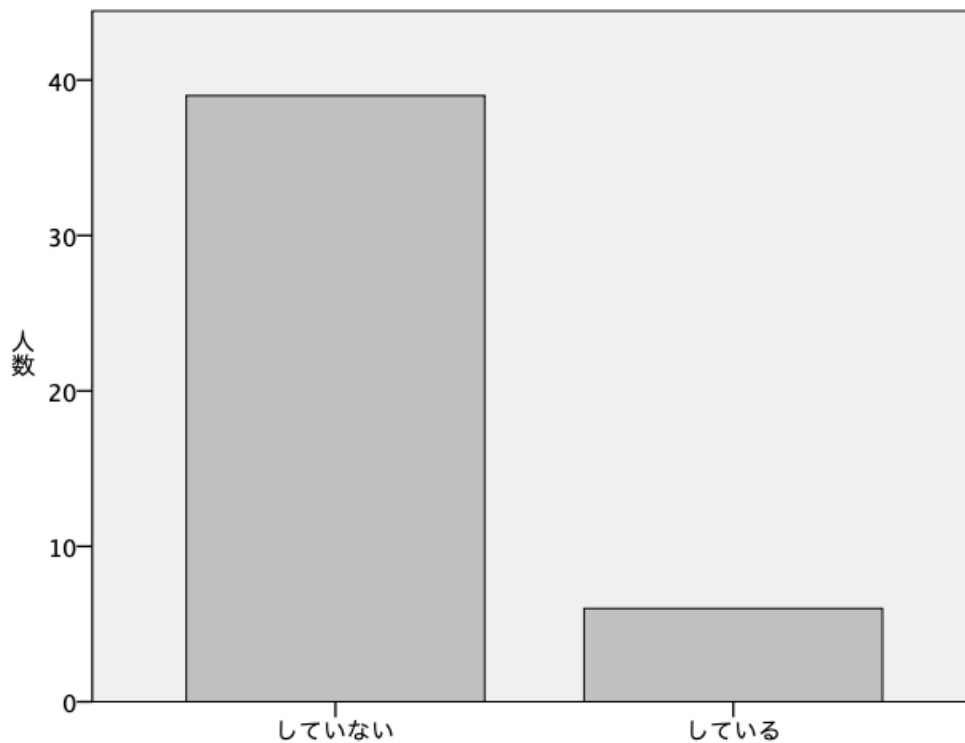


図2.7 インターネットの利用

8. 就業形態

就業形態については、就業していない「無職」の人が約9割を占めた。その一方、パート・アルバイトや自営業という形態で就業している人もわずかではあるが存在した(表2.8、図2.8)。

表2.8 就業形態

	人数	割合(%)
フルタイム	0	0.0
パート・アルバイト	2	4.4
自営業	1	2.2
無職	40	88.9
その他	0	0.0
無回答	2	4.4
合計	45	100

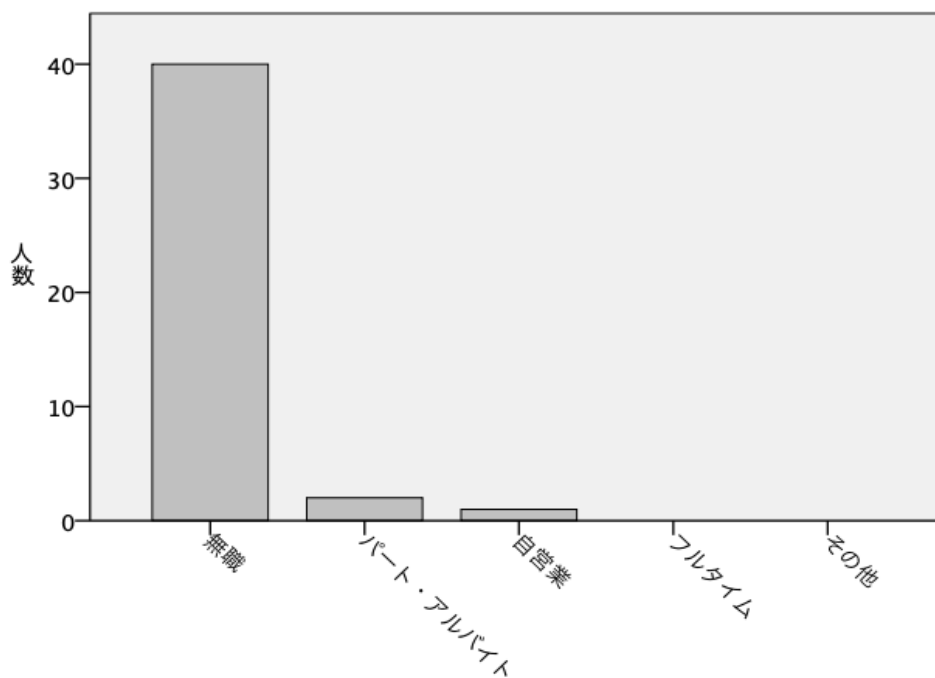


表2.8 就業形態(無回答を除く)

9. プロダクティブ・アクティビティ

(1) 有償労働

有償労働については、約9割の人が「していない」と回答した一方、約1割の人は「している」と回答した(表2.9.1、図2.9.1)。

表2.9.1 有償労働

	人数	割合(%)
している	4	8.5
していない	41	91.5
合計	45	100

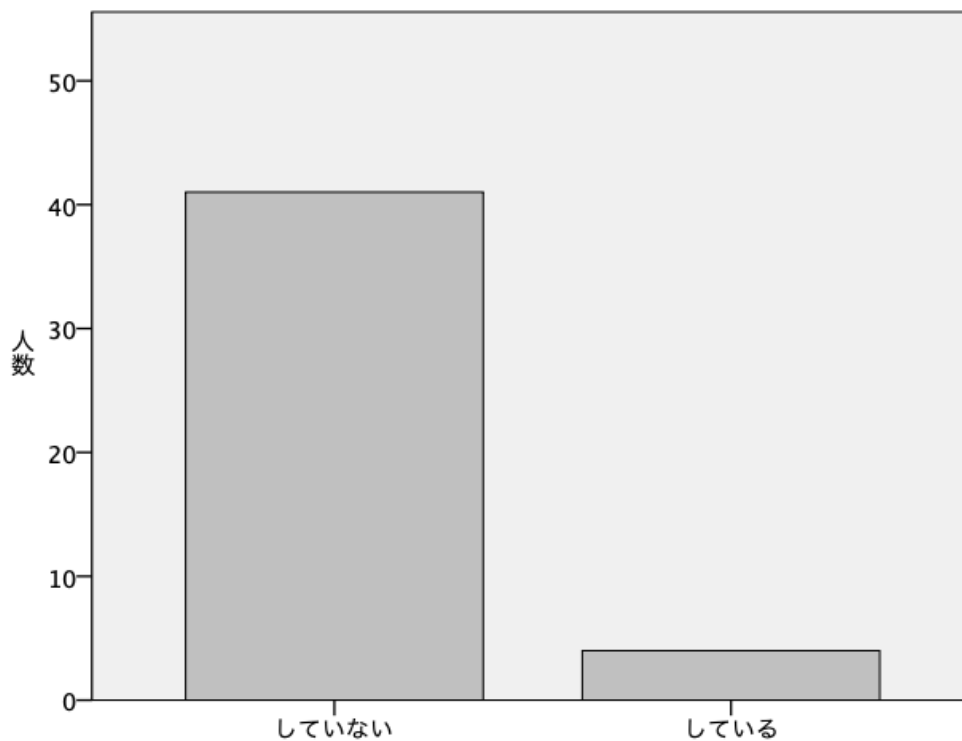


図2.9.1 有償労働

(2) 家庭内無償労働

家庭内無償労働については、9割近くの人が「している」と回答した(表2.9.2、図2.9.2)。

表 2.9.2 家庭内無償労働

	人数	割合(%)
していない	6	13.3
している	39	86.7
合計	45	100

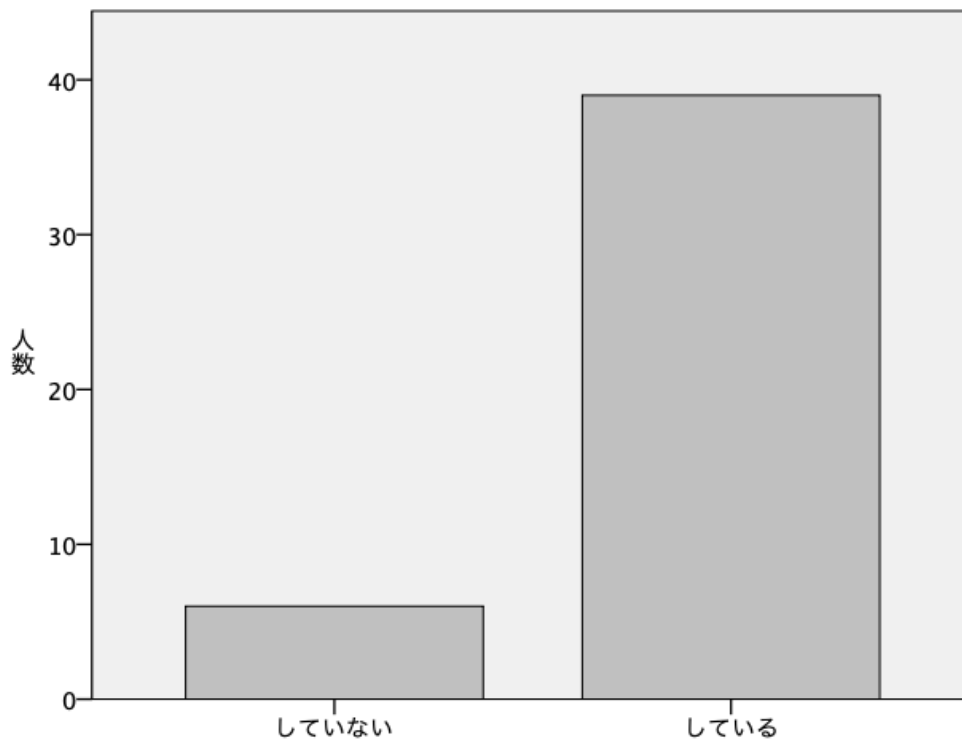


図 2.9.2 家庭内無償労働

(3) 家庭外無償労働

家庭外無償労働については、7割を上回る人が「していない」と回答した一方、3割近くの人は「している」と回答した(表2.9.3、図2.9.3)。

表 2.9.3 家庭外無償労働

	人数	割合(%)
していない	33	73.3
している	12	26.7
合計	45	100

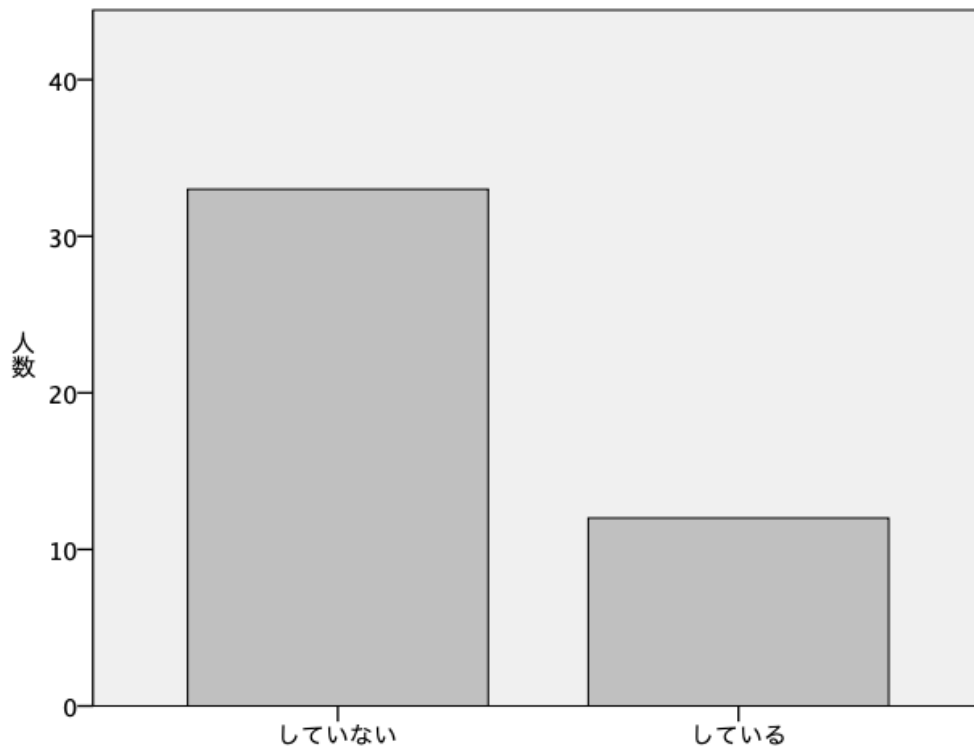


図 2.9.3 家庭外無償労働

10. 65歳以降に行ったことのある社会参加活動(複数選択可能項目)

65歳以降に行ったことのある(そよ風以外での)社会参加活動項目と性別(分割変数)とのクロス分析を行った。¹⁷その結果、1割以上の回答のあったもののなかで、多いものから「町内会での活動」(約3割)、「老人クラブでの活動」(約1割5分)、「サークルでの活動」(約1割)、「習い事活動」(約1割)、「ボランティアとしての活動」(約1割)の順となったが、経験のないもしくは非常に少ない活動も目立った(表2.12.1)。

そこで、12の社会参加活動項目のうち1つ以上活動を行なった経験のある人とそれ以外の人の数・割合を確認することにした。その結果、ほとんど(約8割5分)の人がいずれかの活動経験があることについて確認された(表2.10.2)。

表2.10.1 男女ごとの65歳以降に行ったことのある社会参加活動¹⁸

	女性	男性	合計
町内会での活動	19(42.2%)	3(6.7%)	22(48.9%)
地区社会福祉協議会での活動	3(6.7%)	0(0.0%)	3(6.7%)
老人クラブでの活動	12(26.6%)	0(0.0%)	12(26.6%)
交通安全協会での活動	2(4.4%)	0(0.0%)	2(4.4%)
民生児童委員としての活動	2(4.4%)	0(0.0%)	2(4.4%)
サークルでの活動	11(24.4%)	0(0.0%)	11(24.4%)
習い事活動	9(20.0%)	1(2.2%)	10(22.2%)
サロンでの活動	0(0.0%)	3(6.7%)	3(6.7%)
鷗盟大学での活動	8(17.8%)	1(2.2%)	9(20.0%)
高校、大学、大学院での活動	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
ボランティアとしての活動	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
就労活動	1(2.2%)	1(2.2%)	2(4.4%)

¹⁷ 分析対象者において、男性は全体のうち約1割ほどであり、女性(約9割)と比べ非常に少ないが、試行的に、分割変数に性別を設けたピラミッド形式のグラフにて視覚的に確認した(図2.10)。

¹⁸ 括弧内の%は、分析対象者全体のなかでの割合を示す。

表 2.10.2 65 歳以降の社会参加活動経験

	人数	割合(%)
活動経験なし	7	15.6
活動経験あり	38	84.4
合計	12	100.0

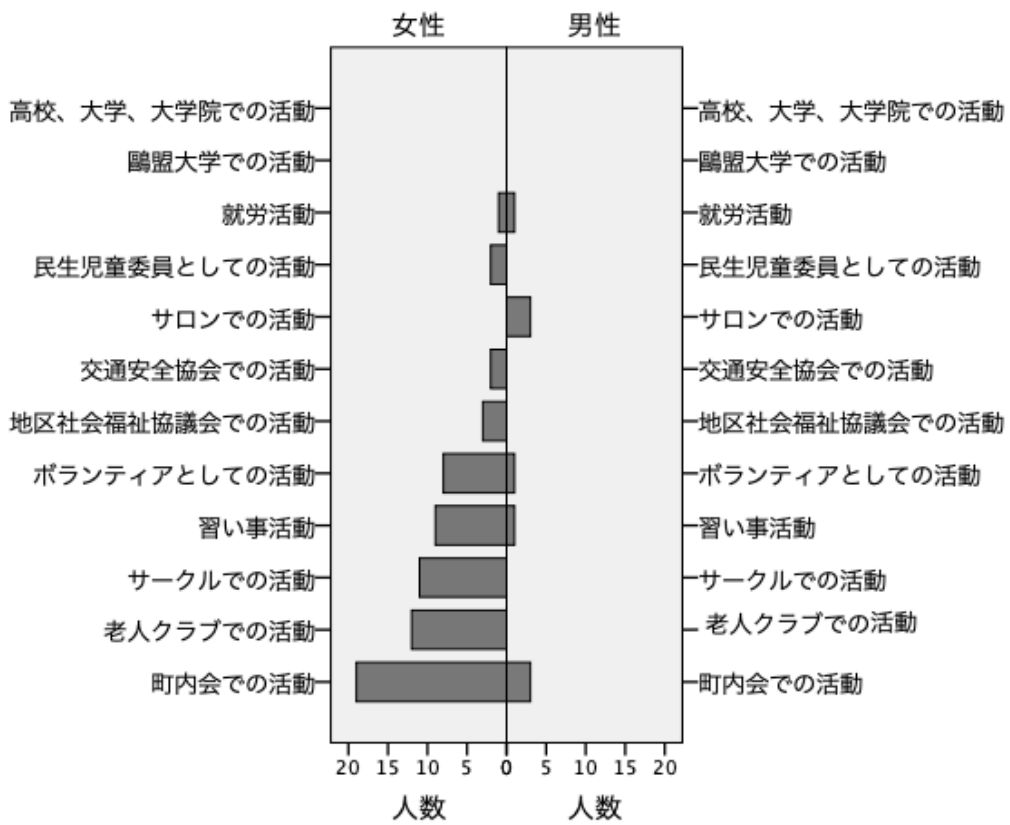


図 2.10 男女ごとの 65 歳以降に行ったことのある社会参加活動

11. そよ風を知ったきっかけ

そよ風を知ったきっかけについては、「知人・友人」が約4割と最も多く、それに「新聞」(約3割)が続き、両者をあわせて約7割を占めた(表2.11、図2.11)。

表2.11 そよ風を知ったきっかけ

	人数	割合(%)
新聞	14	31.1
チラシ	2	4.4
町内会	1	2.2
民生委員	3	6.7
地区社会福祉協議会	1	2.2
知人・友人	17	37.8
ラジオ	0	0.0
その他	7	15.6
合計	45	100

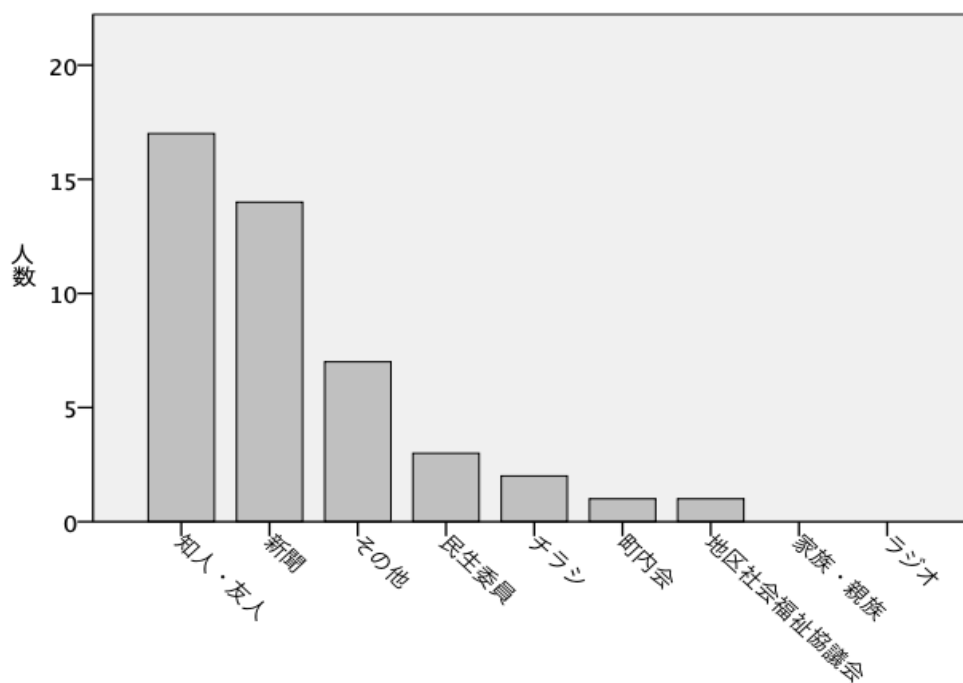


図2.11 そよ風を知ったきっかけ

12. そよ風の初回時の利用目的(複数回答可能項目)

そよ風の初回時の利用目的については、「健康づくり」と「仲間づくり」とする回答が特に多く、双方に5割を上回る回答がみられた(表2.12、図2.12)。

表2.12 そよ風の初回時の利用目的

	人数	割合(%)
居場所づくり	6	13.3
健康づくり	26	57.8
仲間づくり	25	55.6
余暇活動(暇つぶし)	4	8.9
なんとなく	5	11.1
その他	4	8.9

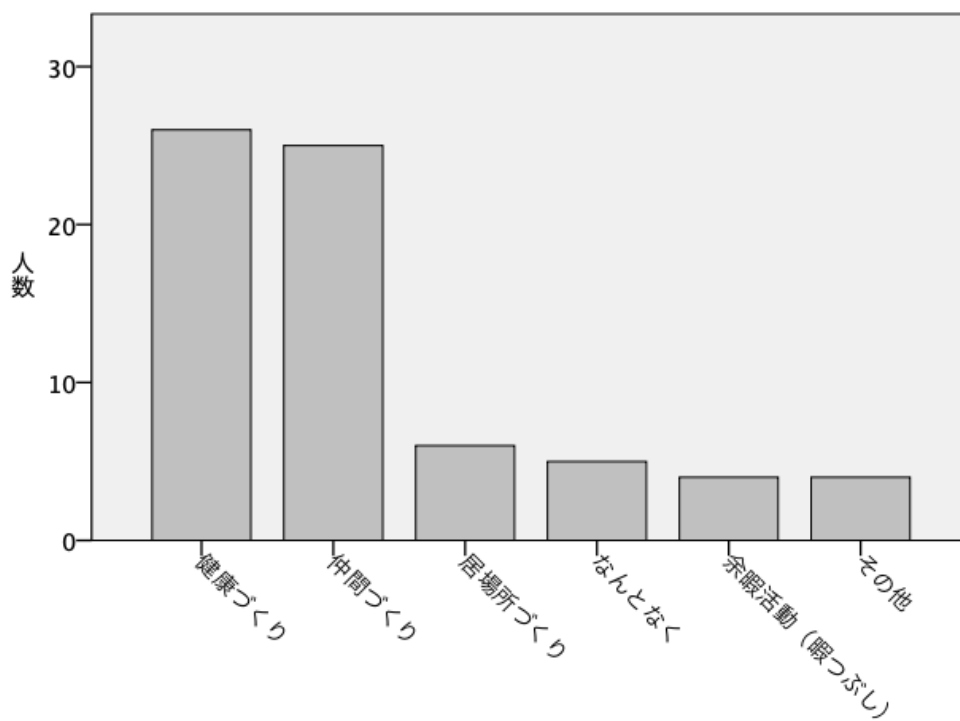


図2.12 そよ風の初回時の利用目的

13. そよ風の利用に対する初回時の心配事(複数回答可能項目)

そよ風の利用に対する初回時の心配事については、「特になし」が約6割と最も多く、それに「活動内容に馴染めるか」(約2割)と「通えるか」(約1割)が続いた(表2.13、図2.13)。

表2.13 そよ風の利用に対する初回時の心配事

	人数	割合(%)
他の参加者に馴染めるか	9	20
活動内容に馴染めるか	8	17.8
参加費用	1	2.2
怪しげな活動でないか	2	4.4
通えるか	6	13.3
その他	0	0.0
特になし	26	57.8

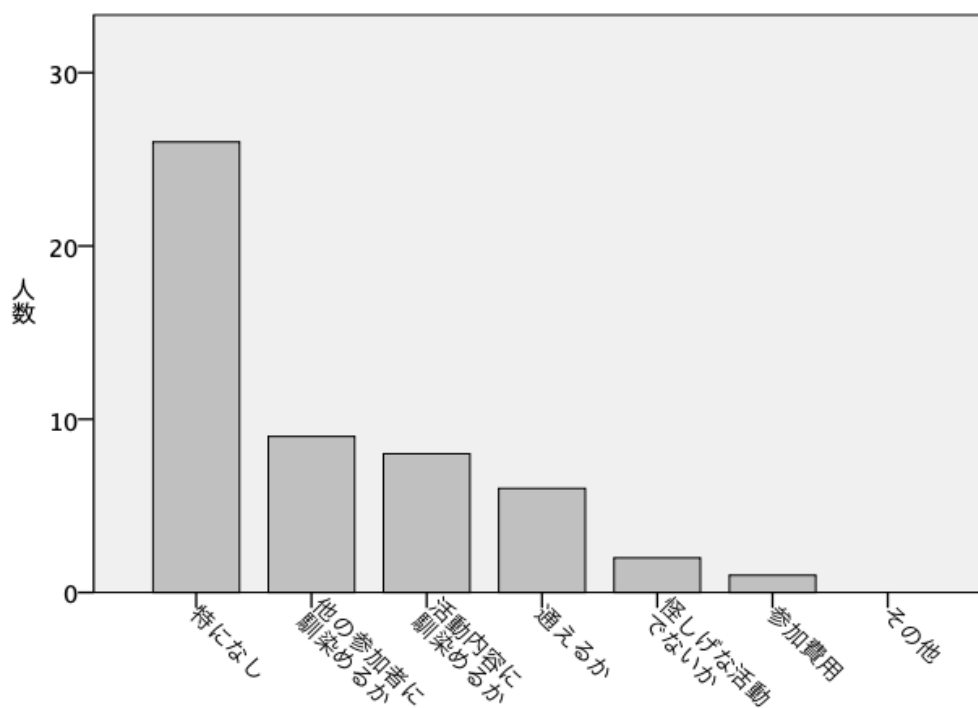


図2.13 そよ風の利用に対する初回時の心配事

14. そよ風の合計利用回数

そよ風の合計利用回数については、「1～10回」が約3割と最も多く、それに「11～20回」(約2割)と「21～30回」(約2割)が続いた。一方で、41回を上回るとの回答も2割ほど存在した(表2.14、図2.14)。

表 2.14 そよ風の合計利用回数

	人数	割合(%)
1～10回	14	31.1
11～20回	10	22.2
21～30回	8	17.8
31～40回	3	6.7
41～50回	6	13.3
51～60回	1	2.2
61～70回	2	4.4
無回答	1	2.2
合計	45	100

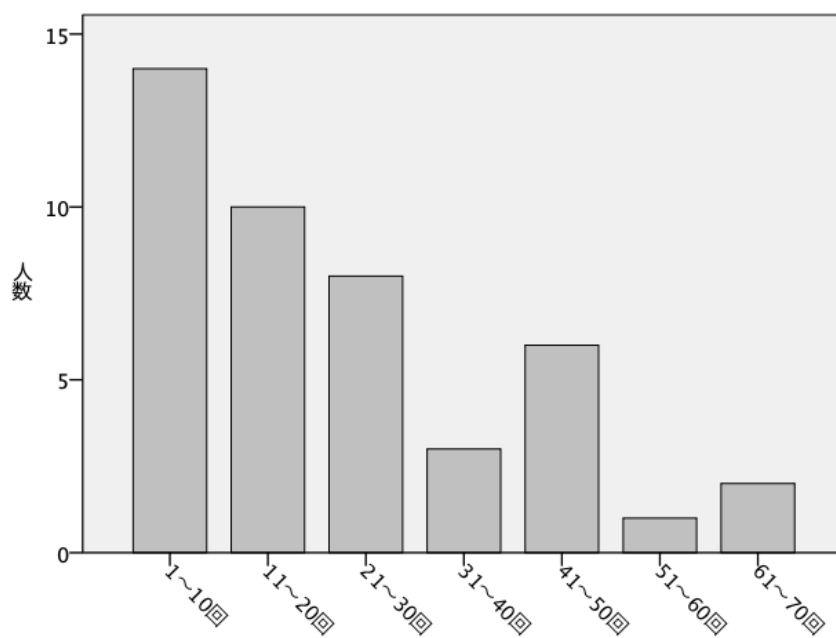


図 2.14 そよ風の合計利用回数(無回答を除く)

15. そよ風を複数回利用している理由(自由記述回答項目)

そよ風を複数回利用している理由に関する記述データを全て確認した後、内容・種類別にカテゴリ化を試みた。その結果、以下のように「楽しい・面白いから(21件)」「仲間・友達・交流(6件)」「健康のため(4件)」「発声・歌を歌うため(4件)」「その他(2件)」という5つのカテゴリが生成された。なお、一度いずれかのカテゴリに属させた記述データであっても、その後登場するカテゴリに関係している場合は再掲し、新たなカテゴリの構成データ・件数に加えることにした。また、各カテゴリに配属させた記述データについては、当該カテゴリと別の内容・種類が含まれている場合でも、つながりのある文章がみられたため、原文のまま記載することとした。

【カテゴリ1】楽しい・面白いから(21件)

- ・おはなしが楽しいです。
- ・いろんな人と話ができるので楽しいから。
- ・知らない人といろいろなお話が聞けて楽しい。
- ・知り合いの方も来ているので楽しいです。
- ・ボランティアと他人との時間の共有を楽しむ。
- ・面白い話。

【カテゴリ2】仲間・友達・交流(6件)

- ・仲間の方と話せる。
- ・友達に会えるから。
- ・地域方々との和。
- ・新しいお友達、顔見知りができる。
- ・皆さんとなかよくしたくって。
- ・色々な人とお話出来る。

【カテゴリ3】健康のため(4件)

- ・健康意識の高揚・運動習慣の確立。

【カテゴリ4】発声・歌を歌うため(4件)

- ・声を出して歌いたいから。
- ・歌って気分転換、笑顔になれる。

- ・声を出せるから。歌の会。昼は一人ですからしゃべらない毎日ですから。

【カテゴリ5】 その他(2件)

- ・一人で家に閉じこもってたくない。
- ・時間が合う時。

16. そよ風で好きなプログラム(2つまで回答可能)

そよ風で好きなプログラムについては、「ハーモニーの会」と「元気はつらっクラブ」とする回答が特に多く、双方に5割を上回る回答がみられた。それに「みんな食堂」(約3割)、「オレンジカフェ」(約2割5分)、「おもいで学校」(2割)が続いた(表2.16、図2.16)。

表2.16 そよ風で好きなプログラム

	人数	割合(%)
みんな食堂	13	28.9
おもいで学校	9	20.0
オレンジカフェ	11	24.4
元気はつらっクラブ	24	53.3
ハーモニーの会	26	57.8
特になし	1	2.2

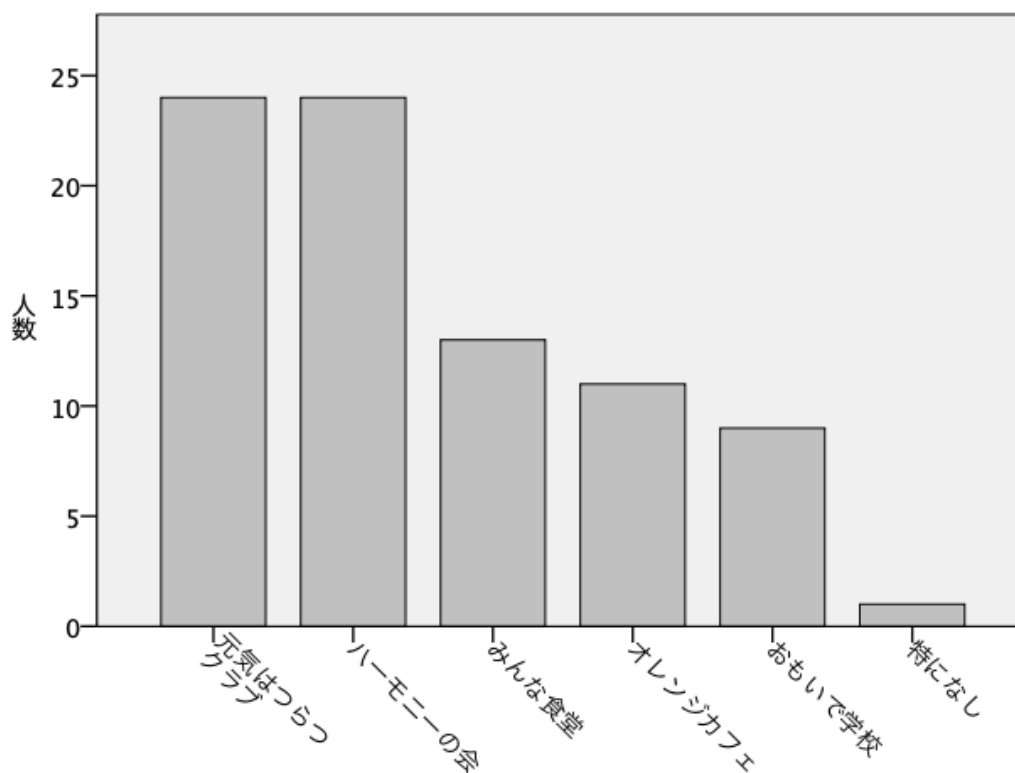


図2.16 そよ風で好きなプログラム

なお、上記の回答に対する理由として、以下の自由記述回答がみられた。

- ・会食の雰囲気を楽しむ。会話を楽しくする。(「みんな食堂」と「元気はつらっクラブ」を選択)
- ・ひとり暮らしで食事が偏っているから。歌が好きだから。(「みんな食堂」と「ハーモニーの会」を選択)
- ・自分で参加できること。ハーモニーは声に自信が無いから。(「オレンジカフェ」と「元気はつらっクラブ」を選択)
- ・楽しいから。(「元気はつらっクラブ」と「ハーモニーの会」を選択)
- ・昭和時代を生きてきた仲間、何か通じるものがたくさんあり安心できる。頑張りができる。(「元気はつらっクラブ」と「ハーモニーの会」を選択)
- ・自然に笑顔になれる。(「元気はつらっクラブ」と「ハーモニーの会」を選択)
- ・参加したのがハーモニーの会だけ。(「ハーモニーの会」を選択)
- ・体も動かせるし、声も出せるから。(「ハーモニーの会」を選択)

17. そよ風の利用が自身に与えた影響(複数回答可能項目)

そよ風の利用が自身に与えた影響については、「気持ちが前向きになった」と「友人ができた」とする回答が特に多く、双方に約5割の回答がみられた。それに続き、「健康づくり・介護予防になった」と「生活にはりがでた」への回答は、それぞれに3割を上回る回答がみられた(表2.17、図2.17)。

なお、「その他」の理由として、「その日はなんとなく気持ちが良いです」「楽しみが増えた」という自由記述回答がみられた。

表2.17 そよ風の利用が自身に与えた影響

	人数	割合(%)
気持ちが前向きになった	23	51.1
生活にはりがでた	14	31.1
活動的になった	6	13.3
友人ができた	21	46.7
健康づくり・介護予防になった	16	35.8
特になし	1	2.2
その他	1	2.2
無回答	2	4.4

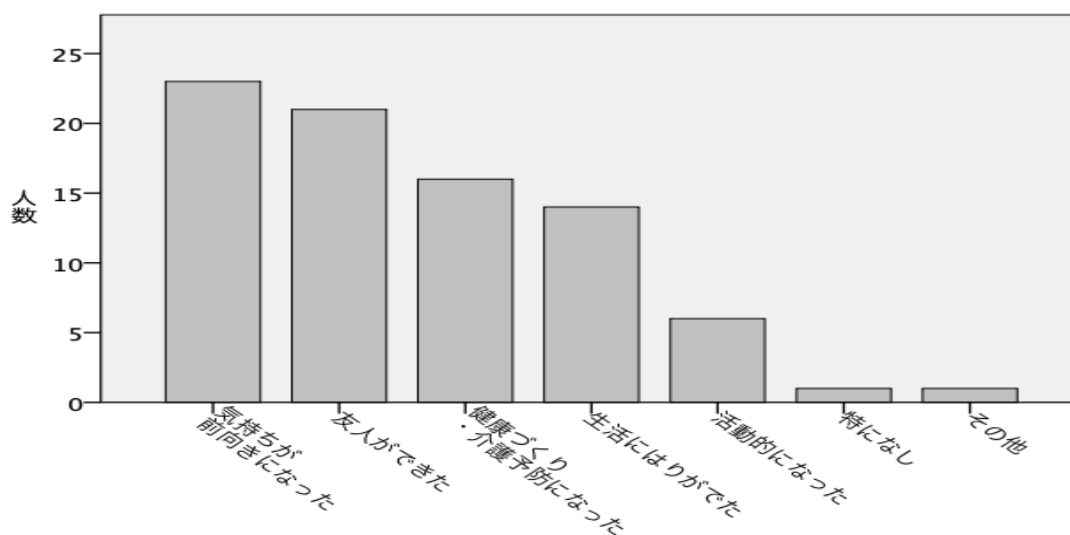


図2.17 そよ風の利用が自身に与えた影響(無回答を除く)

18. そよ風の利用料についての考え

そよ風の利用料についての考えとしては、「どちらともいえない」が約4割と最も回答が多かった。それに「有料とすべき」(約3割)と「無料とすべき」(1割強)が続いた(表2.18、図2.18)。

表2.18 そよ風の利用料についての考え

	人数	割合(%)
無料とすべき	6	13.3
有料とすべき	14	31.1
どちらともいえない	19	42.2
無回答	6	13.3
合計	45	100

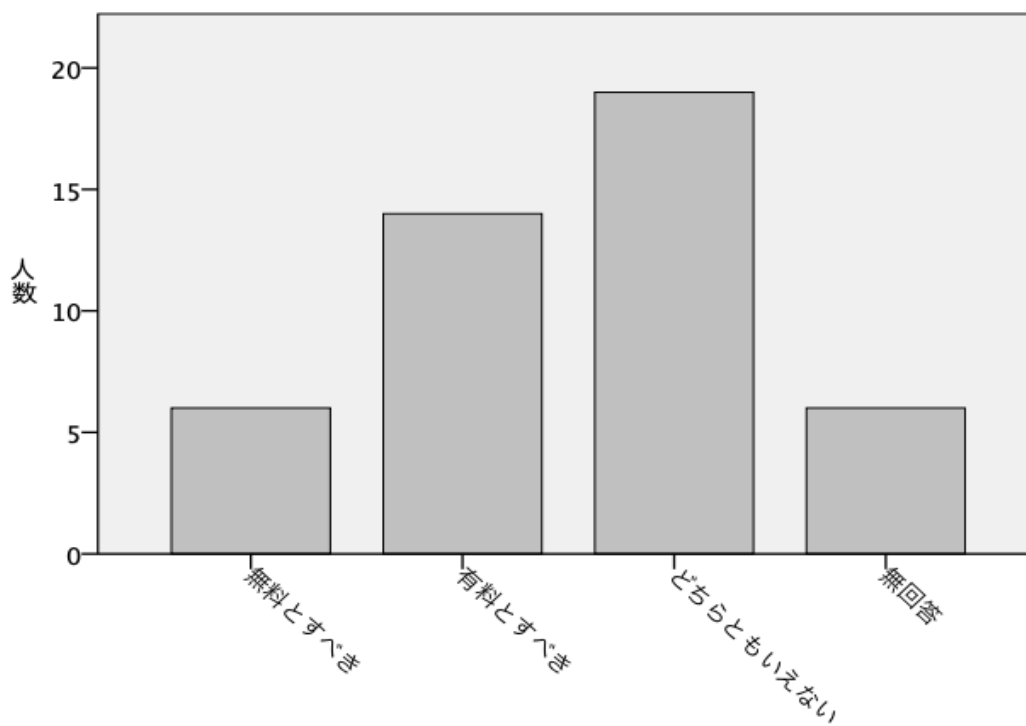


図2.18 そよ風の利用料についての考え

19. そよ風の適正な利用料についての考え(自由記述回答項目)

まず、そよ風の適正な利用料についての考えを自由記述法にて求めた。その後、得られた記述データにおける金額の幅を考慮したうえで、「100 円」「200～300 円」「400～500 円」「600 円以上」「無回答」にカテゴリ分けし、集計した。

(1)「みんな食堂」の適正な利用料

「みんな食堂」の適正な利用料への回答としては、「200～300 円」が約 2 割と最も多く、それに「100 円」(約 1 割)が続いた(表 2.19.1、図 2.19.1)。

表 2.19.1 「みんな食堂」の適正な利用料

	人数	割合(%)
100 円	4	8.9
200～300 円	8	17.8
400～500 円	2	4.4
600 円以上	1	2.2
無回答	30	66.7
合計	45	100

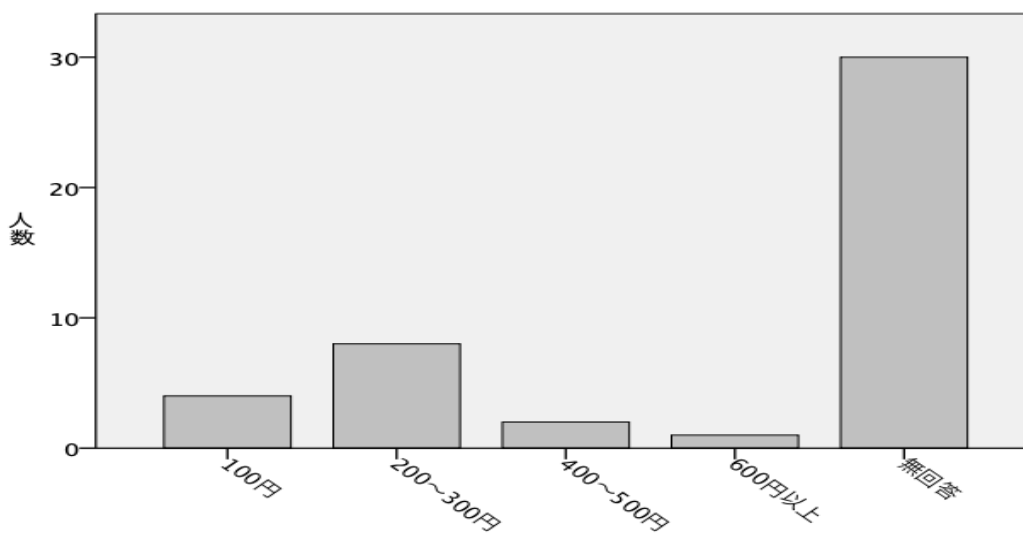


図 2.19.1 「みんな食堂」の適正な利用料

(2) 「おもいで学校」の適正な利用料

「おもいで学校」の適正な利用料への回答としては、「100円」(1割強)が最も多く、それに「200～300円」(1割弱)が続いた(表2.19.2、図2.19.2)。

表2.19.2 「おもいで学校」の適正な利用料

	人数	割合(%)
100円	6	13.3
200～300円	4	8.9
400～500円	0	0.0
600円以上	0	0.0
無回答	35	77.8
合計	45	100

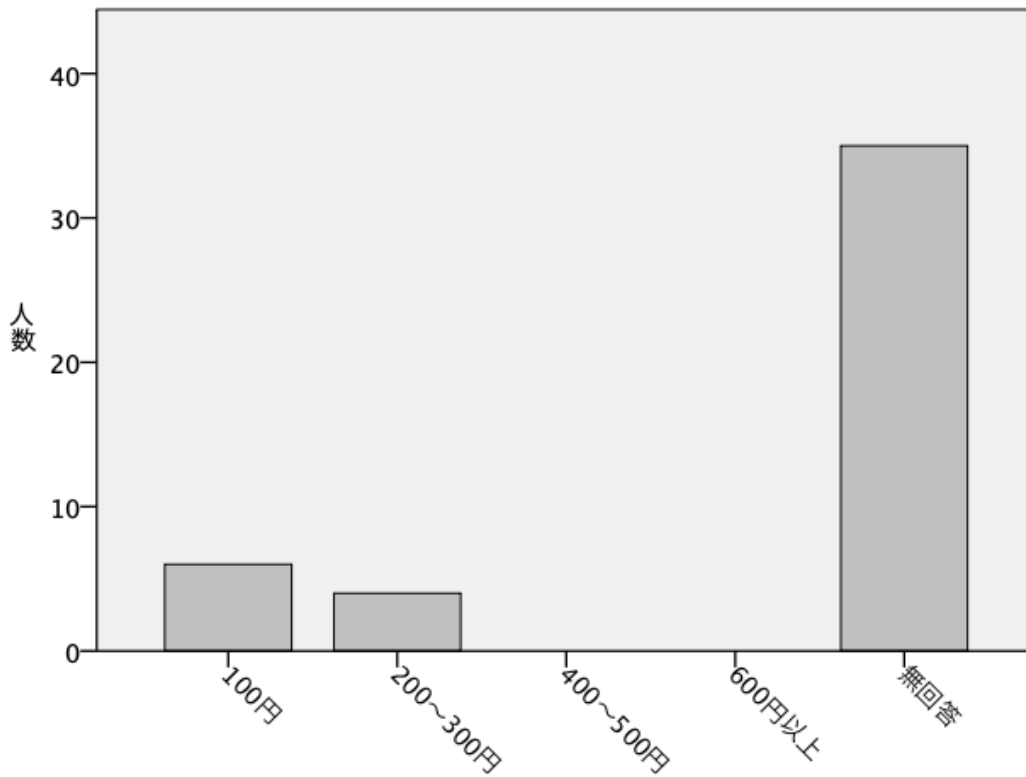


図2.19.2 「おもいで学校」の適正な利用料

(3) 「オレンジカフェ」の適正な利用料

「オレンジカフェ」の適正な利用料への回答としては、僅かな差であるが、「100円」が最も多く(約1割)、それに「200～300円」(約1割)が続いた(表2.19.3、図2.19.3)。

表2.19.3 「オレンジカフェ」の適正な利用料

	人数	割合(%)
100円	6	13.3
200～300円	5	11.1
400～500円	0	0.0
600円以上	0	0.0
無回答	34	75.6
合計	45	100

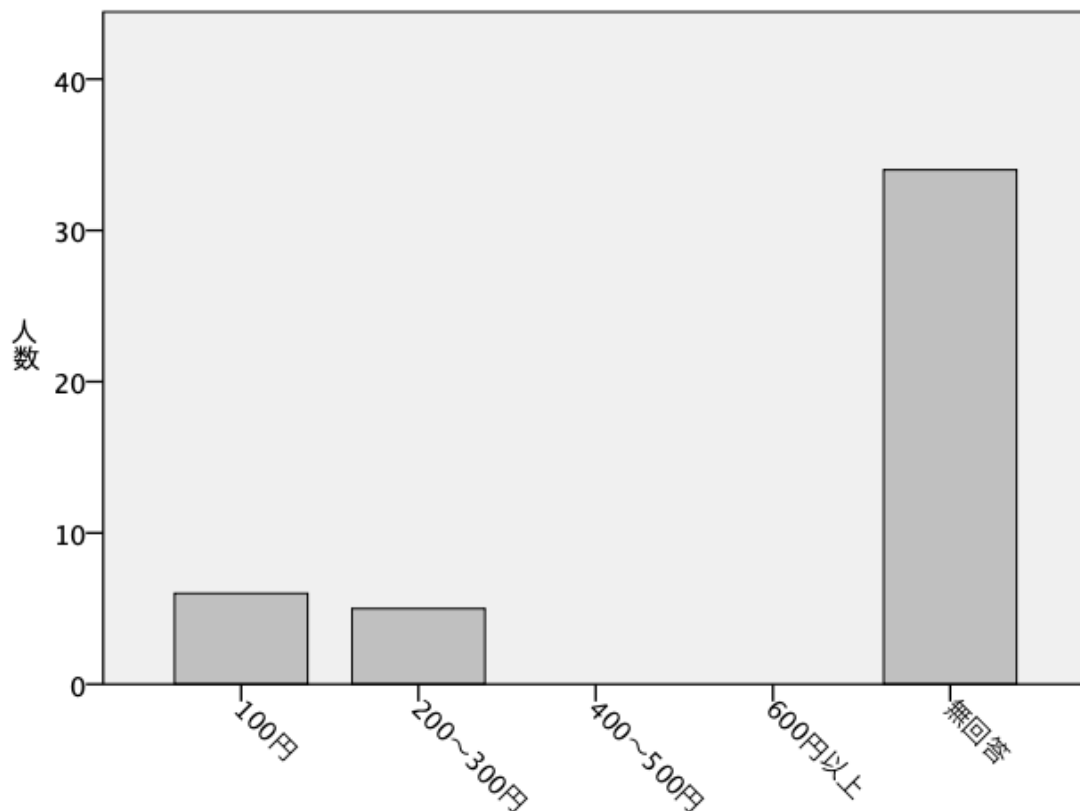


図2.19.3 「オレンジカフェ」の適正な利用料

(4) 「元気はつらつクラブ」の適正な利用料

「元気はつらつクラブ」の適正な利用料への回答としては、「100円」が2割と最も多く、それに「200～300円」(1割弱)が続いた(表2.19.4、図2.19.4)。

表2.19.4 「元気はつらつクラブ」の適正な利用料

	人数	割合(%)
100円	9	20.0
200～300円	3	6.7
400～500円	0	0.0
600円以上	0	0.0
無回答	33	73.3
合計	45	100

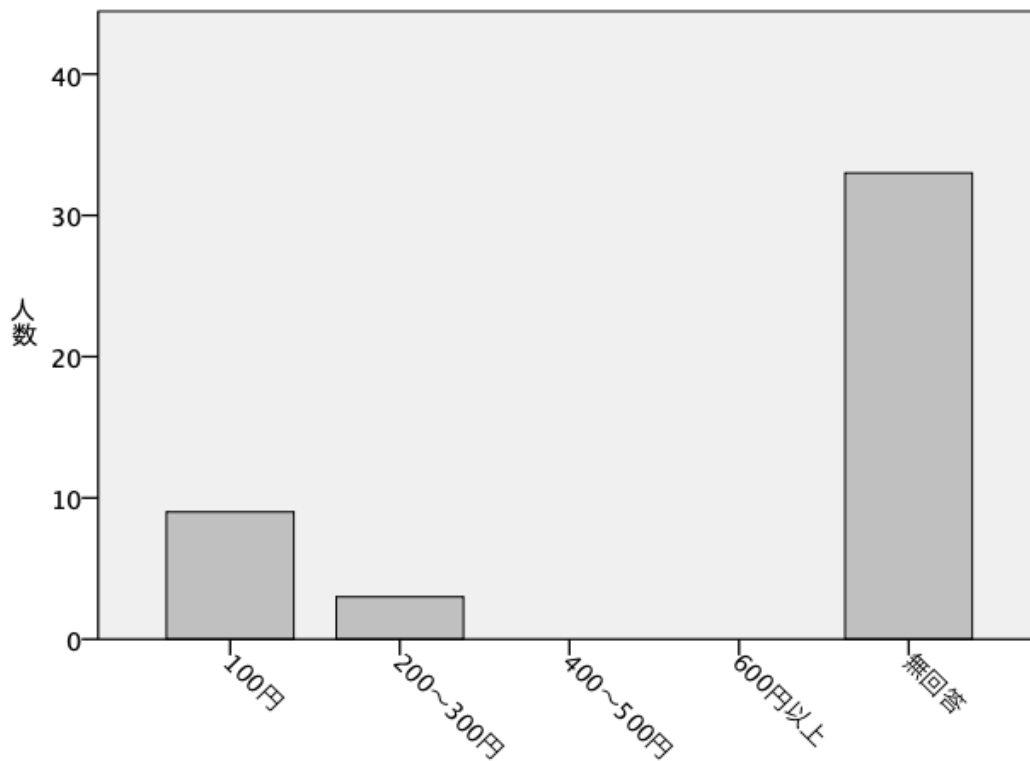


図2.19.4 「元気はつらつクラブ」の適正な利用料

(5) 「ハーモニーの会」の適正な利用料

「ハーモニーの会」の適正な利用料への回答としては、「100 円」が2割弱と最も多く、それに「200～300 円」(1割強)が続いた(表 2.19.5、図 2.19.5)。

表 2.19.5 「ハーモニーの会」の適正な利用料

	人数	割合(%)
100 円	8	17.8
200～300 円	6	13.3
400～500 円	0	0.0
600 円以上	0	0.0
無回答	31	68.9
合計	45	100

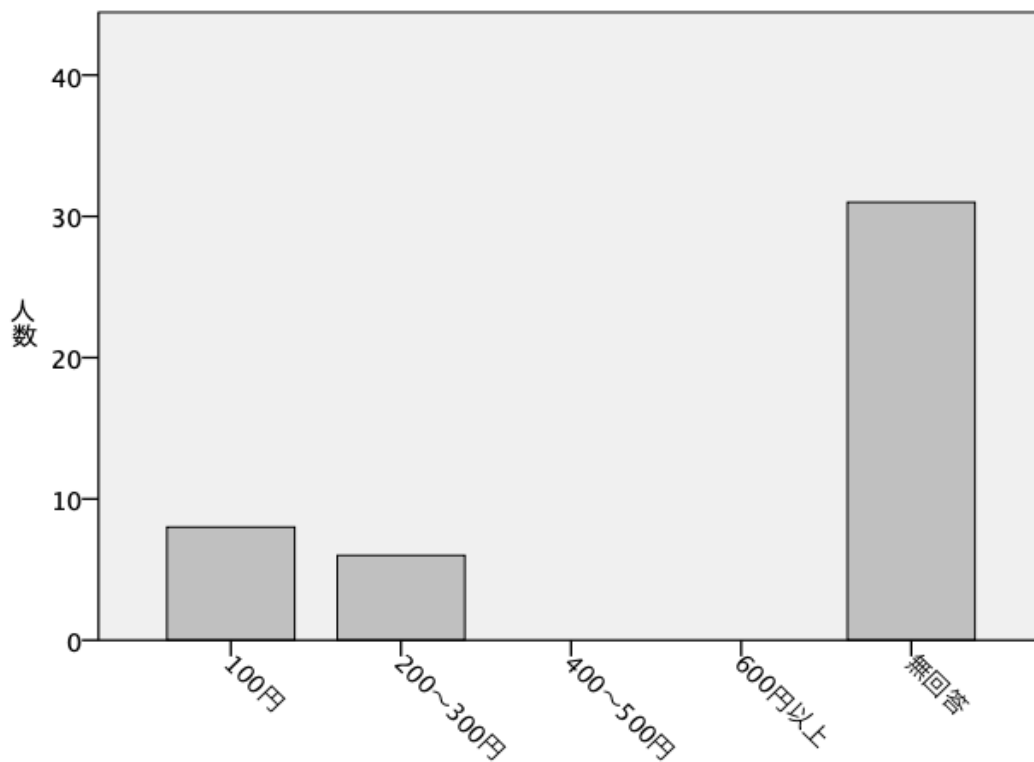


図 2.19.5 「ハーモニーの会」の適正な利用料

20. 八戸地域における高齢者の居場所の有無

八戸地域における高齢者の居場所の有無については、「ある」とする回答が4割に満たなかった(表2.20)。また、各項目の年齢層別の大まかな状況をみるため、それを分割変数としたピラミッド形式のグラフを構築して視覚的な確認を試みた。その結果、後期高齢者の回答は多いものから「ある」「どちらともいえない」「ない」という順であるのに対して、前期高齢者の回答については、度数が少ないなかではあるが、「ある」と「ない」が同数程度であることが分かった(「どちらともいえない」は皆無)(図2.20)。

表2.20 八戸地域における高齢者の居場所の有無

	人数	割合(%)
ない	9	20.0
どちらともいえない	9	20.0
ある	17	37.8
無回答	10	22.2
合計	45	100

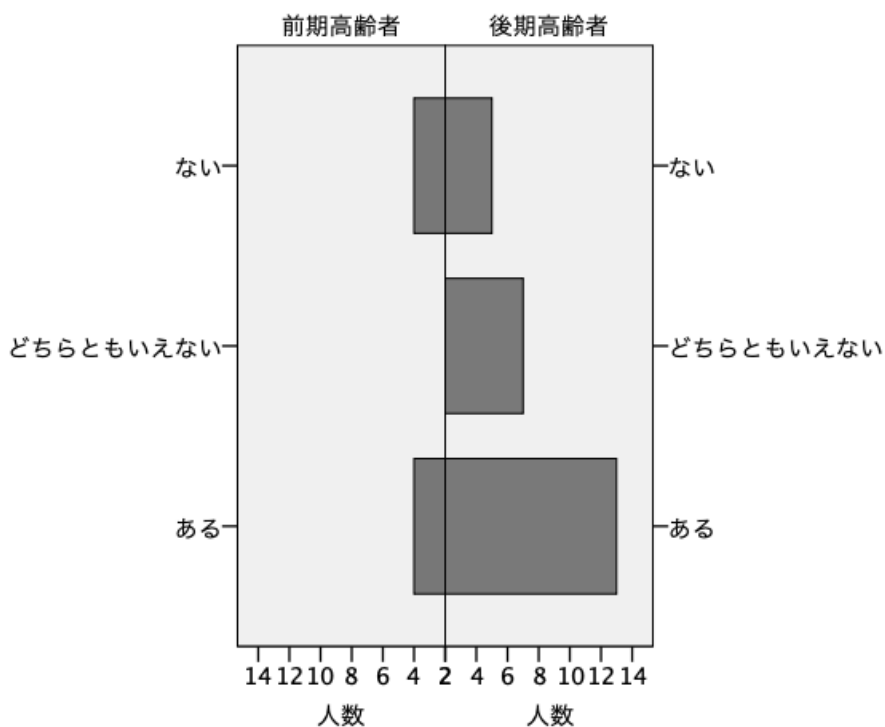


図2.20 年齢層ごとの八戸地域における高齢者の居場所の有無

21. 八戸地域において求める高齢者の居場所(複数回答可能項目)

八戸地域において求める高齢者の居場所については、「ボランティア的な就労の場」、「若い世代と交流する場」及び「生涯学習の場」にそれぞれ約3割の回答がみられた(表2.21、図2.21)。

なお、「その他」の回答理由として、「同世代と交流する場」という自由記述回答がみられた。

表2.21 八戸地域において求める高齢者の居場所

	人数	割合(%)
賃金を得られる就労の場	2	4.4
ボランティア的な就労の場	13	28.9
社会貢献活動の場	3	6.7
若い世代と交流する場	13	28.9
正式な学位を得られる学習の場	2	4.4
生涯学習の場	12	26.7
その他	4	8.9

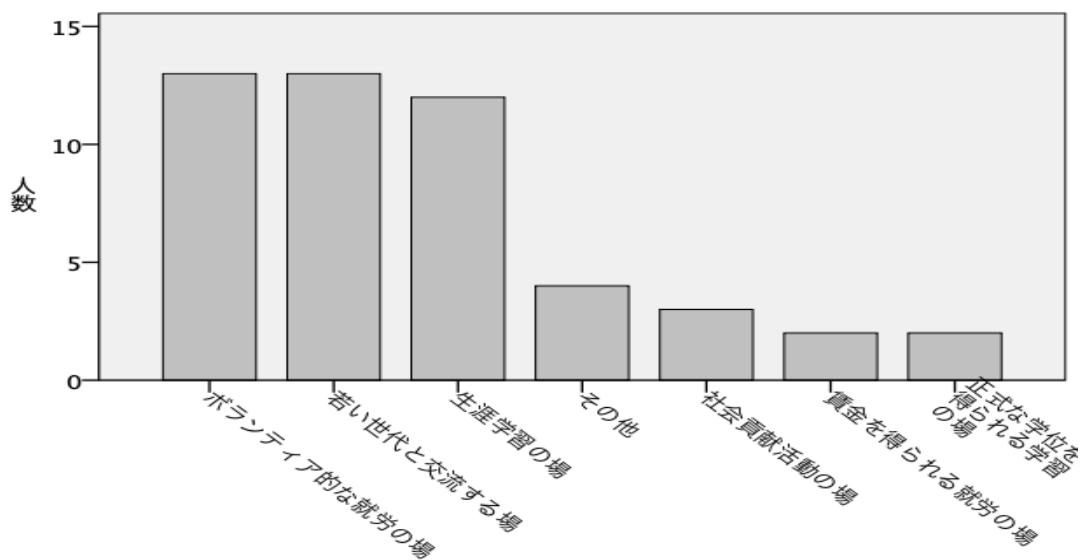


図2.21 八戸地域において求める高齢者の居場所

22. 八戸地域における高齢者の居場所の確保・創出・維持についての具体案(自由記述回答項目)

- ・そよ風のように気軽に来れる場。
- ・公民館講座等、色々あるので、自分のやってみたい事の一つぐらいはあるかと思いません。
- ・同年代の人達との会話(雑談も含めて)をする場所が欲しい。
- ・家の近くからいけるところを考えると、学校の空き教室等利用できないでしょうか。
- ・回数に限らずにいつでも受け入れて欲しい。
- ・自ら出て歩くことが少ないため、新聞以外に町内会で読めるよう広報して欲しい。

23. GSE

今後の調査研究及び実践のための基礎資料とするため、心理的要因であるGSEについても把握を試みた。GSEの測定には、坂野等(1986)¹⁹が開発した「一般性セルフ・エフィカシー尺度(以下、GESE)」を使用した。GESEは16の質問からなり、「行動の積極性」「失敗に対する不安」「能力の社会的位置づけ」の3因子より構成される。回答は二件法で、得点は0から16点に分布し、得点の高いほうがGSEの高いことを示す。またGESEは、一般成人のGSEを測定する尺度として高い信頼性と妥当性を有している(Kuder-Richardsonの21式による信頼度係数は $\gamma=.81$ 、再テスト法による相関関係は $\gamma=.84$)²⁰。さらにGESEは、「地域福祉向上パワースケール」との間に有意な相関が確認²¹されている。本調査では、GESEの合計点を確認した後にその高低の程度をあらわす5段階評定値²²、すなわち、「LOW(成人男性：0～4点、成人女性：0～3点)」、「RATHER LOW(成人男性：5～8点、成人女性：4～7点)」、「MEDIATE(成人男性：9～11点、成人女性：8～10点)」、「RATHER HIGH(成人男性：12～15点、成人女性：11～14点)」及び「HIGH(成人男性：16点、成人女性：15～16点)」を考慮して、「LOW」と「RATHER LOW」を「低値群」、「MEDIATE」を「中値群」、「RATHER HIGH」と「HIGH」を「高値群」といった形で3カテゴリに分けた。

¹⁹ 坂野雄二, 東條光彦. 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み. 行動療法研究. 1986. 12(1). 73-82.

²⁰ 坂野雄二. 一般性セルフ・エフィカシー尺度の：妥当性の検討. 早稲田大学人間科学研究. 1989. 2(1). 91-98.

²¹ 渡辺裕一. 地域福祉における住民参加促進の実証的検討を目指して：住民が地域福祉向上に働きかけるパワーの測定の試み. 社会福祉学評論. 2004. 4. 7-17.

²² 坂野雄二. 一般性セルフ・エフィカシー尺度の：妥当性の検討. 早稲田大学人間科学研究. 1989. 2(1). 91-98.

GSE の程度については、低値群が最も多く、それに「中値群」、「高値群」が続いた。「中値群」と「高値群」を合わせると約4割であるが、「低値群」が4割以上存在した(表2.23、図2.23)。

表 2.23 GSE の程度

	人数	割合(%)
低値群	19	42.2
中値群	12	26.7
高値群	6	13.3
欠損 ²³	8	17.8
合計	45	100

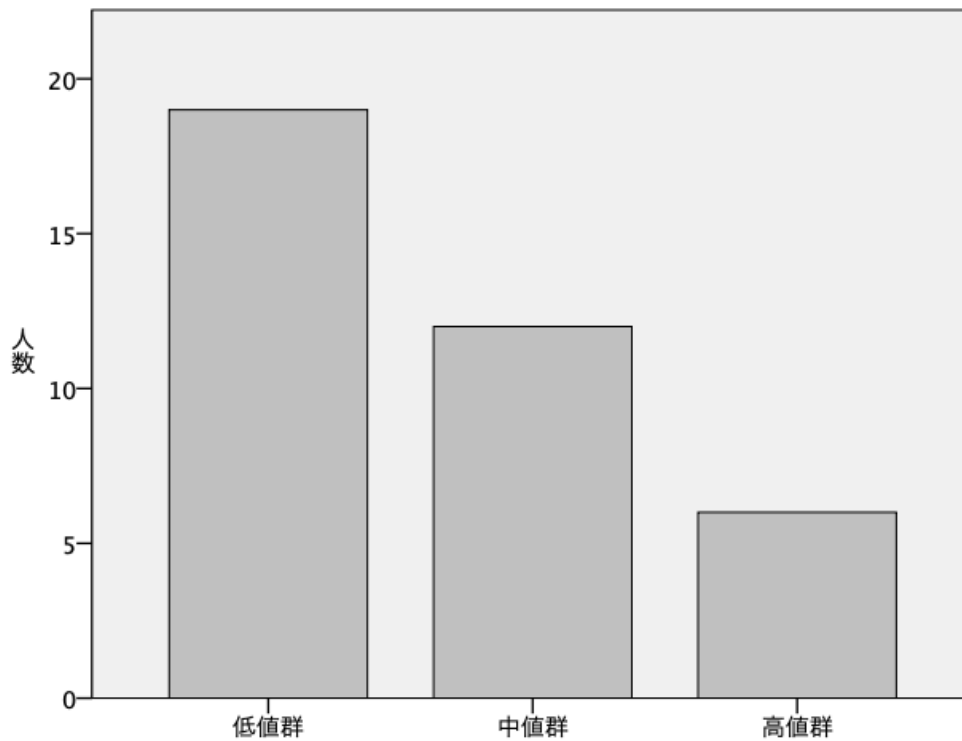


図 2.23 GSE の程度(欠損を除く)

²³ GSESの項目に1つ以上無回答があったものをさす。

Ⅲ. まとめ

本調査によって、地域に根ざしつつ、高齢者を含む地域住民に対する居場所提供サービスに取り組むそよ風の利用者に関する基礎的な資料が得られた。具体的には、「性別」「年齢」「居住地域」「世帯形態」「要介護認定判定状況」「IADL能力」「インターネットの利用」「就業形態」「有償労働」「家庭内無償労働」「家庭外無償労働」「65歳以降に行ったことのある社会参加活動」「そよ風を知ったきっかけ」「そよ風の初回時の利用目的」「そよ風の利用に対する初回時の心配事」「そよ風の合計利用回数」「そよ風を複数回利用している理由」「そよ風で好きなプログラム」「そよ風の利用が自身に与えた影響」「そよ風の利用料についての考え」「そよ風の適正な利用料についての考え」「八戸地域における高齢者の居場所の有無」「八戸地域において求める高齢者の居場所」「八戸地域における高齢者の居場所の確保・創出・維持についての具体案」「GSE」について実態把握された。

本調査の分析対象件数と分析手法を考慮すれば、統計的な信頼性や妥当性を有するデータに基づく解釈とは必ずしもいえないが、今後の八戸市における生活支援体制整備、なかんずく、そよ風及びその他の居場所提供サービスを行おうとする(または、既に行なっている)機関などでの支援実践やこの種の調査研究の参考資料とするためにも、分析結果より確認、あるいは可能性が示唆された主な事項を以下に示すことにしたい。

第1に、そよ風の利用者は、女性が圧倒的に多く、前期高齢者よりも後期高齢者のほうが2倍ほど多かった。²⁴さらに、独居の高齢者よりも配偶者や子ども、孫と同居している高齢者のほうが多かった。これらについては、当事者ニーズや複合的な社会的状況、そよ風の運営方針なども前提要因として関連しようが、高齢者の居場所提供サービスとして包括的且つシームレスなサービス提供体制を築こうとする際には、男性や前期高齢者の利用に結びつけるための当事者ニーズの把握と対応、そして後述する当該サービス情報の周知システムの構築が重要となる。

第2に、わが国において、高齢者の閉じこもりや介護予防などについては社会的課題として既に広く知られているが、当事者がそよ風を利用すること自体、社会参加とみなせる。そよ風が利用者から心理的居場所として認識され、継続的な利用に結びついた場合、実際的に、介護予防にもつながると考えられる。そのような機能をそよ風は潜在的に有していると推察される。

²⁴ 図2.2のヒストグラムからは、後期高齢者のなかでも75歳から80歳位までの年齢層に特に利用者が多かったことが分かる(平均年齢は小数点第二位を四捨五入して76.7歳)。

第3に、プロダクティブ・アクティビティに関しては、分析対象者の9割以上が無職であったが、家事や庭の手入れなどをさす家庭内での無償労働を約9割、無償労働ボランティアや近隣住民の手伝い、民生委員活動などをさす家庭外無償労働を約3割が行なっていた。また、65歳以降の社会活動経験についての分析結果からは、それぞれの活動への参加経験の多様さがうかがえた。当事者が望む高齢者の居場所について、賃金を得られる就労の場への回答が1割に満たないのに対して、ボランティア的な就労の場は約3割の回答を得ていることから、就労意欲を有する人が一定程度存在すること、そして、同じ労働活動であっても、完全な有償労働よりもボランティア的な労働を望む人のほうが多いことが確認された。したがって、高齢者の居場所提供サービスのなかに就労機会(特にボランティア的な形態のもの)を組み込むことが当事者のニーズに即した実践となり得る可能性がある。

第4に、そよ風は、同じ物理的空間で人とのつながりや役割を持つことがかなう社会的居場所としての機能を有している。利用者の大半が能動的にそよ風を複数回利用していることから、本スペースが心理的居場所として認識され、その結果、継続的な利用につながっている可能性がある。これについては、そよ風を複数回利用している理由に関する記述データや本スペースのある白銀町以外の地域・地区から通う利用者が4割ほど存在すること、利用後に半数以上の人は気持ちが前向きになっていること、半数近くの人に友人ができてきていること、3割以上の人々が健康づくりや介護予防になったと自覚していることなどが根拠となろう。取り組みの継続やより質の高いサービスの提供を目指す観点からは、今後も当事者ニーズの把握を継続的に行い、それを居場所提供サービスに反映させ、当該実践システムを深化、強化していくことが重要となる。現状として、約3割の人がボランティア的な就労の場(前述)、若い世代と交流する場、生涯学習の場という機能を「居場所」に求めていることが明らかとなったが、これは当事者ニーズとして検討材料となる。

第5に、そよ風の適正な利用料については、「無料とすべき」と考える利用者が1割程度に留まった。それ以外の人々のプログラムごとの適正と考える利用料についても現状把握されたが、利用経験の浅い人も少なくないため、今後の取り組みの展開のなかでの当事者に対する継続的な意思確認が求められよう。なお、各プログラムについては、100～300円という価格帯を利用料として適正と考える人が一定程度存在したことについては、これも検討材料となる。

第6に、生活支援サービスに属する居場所提供サービスという社会資源の認知と利用についても触れておきたい。八戸市による「平成28年度高齢者の生活支援体制整備へ向けた

質問紙調査(以下、平成 28 年度調査)」²⁵では、市内の自立的な在宅高齢者において、社会資源の認知と利用の程度が非常に低いことについて浮き彫りとなった。そのうえで、高齢者の生活支援体制の整備を進めるにあたり、社会資源の再確認や掘り起こしを行うことと同時に、既存の社会資源の周知が効果的にされることが重要であることについて指摘された。昨今の社会の情報化の進展具合からは、ICT の利用環境整備とリテラシーの向上による情報収集力の向上が重要と考えられる(例えば、そよ風の存在は Web 上²⁶で把握し、利用案内も閲覧することができる)が、そよ風の利用者においてインターネットを利用している人は 1 割ほどであり、これは平成 28 年度調査のデータと同程度であった。このことから、現実的にまず着手すべきは、当事者が馴染んだ旧来の情報媒体からの情報獲得のためのさらなる環境整備といえよう。分析対象者において、八戸地域のそよ風以外の高齢者の居場所を認知していた人が 4 割に満たないことについては、より詳細な状況把握が望まれる。これについては、家庭環境や友人の有無などといった複合的な社会的状況が関係していようが、単に自宅の近辺に居場所が存在しない可能性や居場所提供機能のある既存の生活支援サービスが認知されていない可能性についても疑う必要がある。

²⁵ 小柳達也. 平成28年度高齢者の生活支援体制整備へ向けた質問紙調査結果報告書(バス券の交付を受ける高齢者を対象とした調査編). 八戸市高齢福祉課. 2017. 1-14.

²⁶ 社会福祉法人白銀会. 地域交流スペースそよ風のご案内. <http://green-hts.jp/wp-content/uploads/2016/08/そよ風-リーフレット.pdf>(2019年1月7日アクセス).

平成 30 年度 八戸市における高齢者の居場所に関する調査報告書：
社会福祉法人白銀会「地域交流スペースそよ風」利用者に対する調査編

発行所 八戸市 高齢福祉課
〒031-8686 青森県八戸市内丸一丁目 1 番 1 号
発行日 平成 31 年 1 月 31 日
執筆者 小柳達也(八戸学院大学健康医療学部)